発達心理学

開講日　・6/22　18:00～21:00 第３回

・6/29　18:00～21:00 第４回　終了！

講師：三浦志織

＜第1章　発達心理学基本概念＞
現代の発達心理学

- ピアジェ（1936 Piaget.J.)の認知発達理論

感覚運動期（０～２歳）

・原始的反射を使って外界へと働きかける。
・単純な動作を何回も繰り返す「循環反応」がみられるようになる。
→「循環反応」と「表象の成立と対象の永続性の関係」

前期操作機（２～７歳）

・自分の立場から見た関係なら理解できるが，他者からの味方を理解できない。思考の基準が子供自身にある
・イメージによって思考する時期。無生物にも生命があると思う「アミニズム」という考え方が特徴。
・物の保存の概念が不十分。見た目に惑わされて判断し，論理的に考えることが難しい。

参照：小野寺敦子（2009)手にとるように発達心理学がわかる本，株式会社かんき出版

＜第1章　発達心理学基本概念＞
現代の発達心理学

- ピアジェ（1936 Piaget.J.)の認知発達理論

具体的操作期（７～１１歳）

・保存の概念が成立される。見た目だけでなく理論的に物事を考えられるようになり，複雑な関係も理解できるようになる。
・物事をカテゴリーによるひとつのまとまりとして捉えることができるようになる。
（ex.いちご，めろん→「フルーツ」）

形式的操作期（１１歳～成人）

・抽象的な概念であっても，仮設を立てて系統的に見ていくことで，物事を論理的に考えられるようになる。
（ex.一次関数y＝ax+bやπ＝3.14）

＜第1章　発達心理学基本概念＞
現代の発達心理学

- 前期操作機（２～７歳）

２歳から幼児期終わりくらいまでの，頭の中の表象レベルで思考でき，言葉やものを意味を理解して使うことができる段階。だがその時の表象は静的でその時々のイメージの重なりである。そのため，その繋がりを基にした論理的推論がうまくできない。

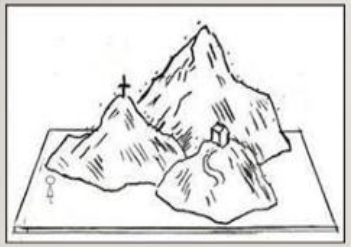
①２歳から４歳くらい：前概念的段階

自己中心的な傾向が強い（他者の視点から物事を捉えることができず，周りの全ての人も自分と同じように外界を知覚している）。自分と周りとの関係を基に，世界のもろもろを理解しようとする。他の人も自分の視点でものを見てると捉える。

＜第Ⅰ章　発達心理学基本概念＞
現代の発達心理学

- 三つ山課題

子供が見ている位置とは別のよころに人形が置かれ，その人形の位置からは山がいくつ見えるか尋ねると，前期操作期の子供は自分自身から見える眺めと他者からの眺めの区別ができず３つと答えてしまう。



＜第Ⅰ章　発達心理学基本概念＞
現代の発達心理学

- 前期操作機（２～７歳）

②４歳から７歳くらい：直感的思考の段階

分類，数量化，関連付け，など論理的な思考を行い始めるが，まだ直感的である。それらをもとにある原則に気づいていない。その時々に直感的に思いつくことで因果関係を推論するが，一貫性をもって考えない。言葉の意味を組み立てるものとして使い，複雑な思考を表現するようになる。それとともに自分の考えを整理できるようになっていくが，まだ十分ではなく，直感に頼る。

＜第Ⅰ章　発達心理学基本概念＞
現代の発達心理学

- 前期操作機（２～７歳）のその他特徴

- 「アミニズム」：無生物にも生命や意識があるように思うこと
- 「実存論」：夢や空想で作り上げられたものをあたかも現実に存在しているように考えること
- 「人工論」：万物は人が作ったものであると考えること

＜第Ⅰ章　発達心理学基本概念＞
現代の発達心理学

- 具体的操作期（７歳から１２歳）

具体的なものを扱う限りにおいて論理的に考える段階をいう。物事の状態の間の返還を表象し，ある時の見え方に遡行を歪められないで，元に戻したり，つながりを考えたりして，論理的推論ができる。

＜第1章　発達心理学基本概念＞
現代の発達心理学

- 形式的操作期（１１歳以降）

　具体的なものについて，経験的事実を考えるだけでなく，それらを記号に直して，その記号について，同様の論理的操作が可能になる段階をいう。あらゆるものごとの形式的な組み合わせを網羅して検討することができる。

設問（２）レポート課題
レポート作成手順

①「心理学」を説明　（他の参考書などを参考に）

②「発達」を説明　（テキスト抜粋）

③「生涯発達」を説明　（テキスト参考）

④幼児前期における自我の発達について説明　（後説明教科書p44～55)

⑤上を踏まえて，保育所保育指針（p180～などを参考）

①「心理学」を説明
（心理学の始まりについて）

- 心理学の始まりは「科学と哲学の間」

　１９世紀の西欧において，心理学が哲学と分化した。人は一体物事の真実をしることができるか，この認識が哲学である。それに対して，心理学は真実を問うのではなく，認識はどのようなメカニズムをとおして成り立つのかを理論化しようとした。

①「心理学」を説明
（心理学の始まりについて

- 心理学＝行動の科学

　心理学を科学として成立させるために，心の動きを図る手立てが必要となる。その手立ては心理物理学によってもたらされた。ウェイバーとフィヒナーの研究がスタート。→心理物理学的測定

①「心理学」を説明
（心理学の始まりについて）

- 心理物理学的測定（フィヒナー法則）

刺激(S)と反応(R)の関係がR＝c log Sで表されるとするもので，反応（感覚）の強さは刺激の量と対数に比例するという考え方。この法則のもとになったのは，ウェイバーの法則。（例えばある重さの終わりを標準として，別の重りを持った時に標準との重さの差を感じ分けてもらう（差があまりに小さいと，同じ重さに感じてしまう）。標準との重さの差のうち，人が感じられる最小の値と，標準の重さの比は一定となる。

①「心理学」を説明
（心理学の始まりについて）

- 心理学実験室のはじまり

フェヒナーが「精神物理学綱領」を完成させた１８６０年を実験心理学の誕生とする人もいるが，一般的にはヴント（1832-1920)がドイツのライプチッヒ大学に最初の心理学研究室を作った１８７９年を誕生としている。

→「心理学の過去は長いが歴史は短い」

②「発達」を説明
③「生涯発達」を説明　（テキスト参考）

- （４）発達段階と発達課題

受精した時から生涯を通じて，身体的に
成長するだけでなく，
知的な発達や運動面の発達，
社会性の発達などさまざまな側面で発達していく。
発達心理学では生涯にわたる過程の発達的特徴
などをもとに一定の時期で区切り理解している。
→エリクソンの漸成的発達段階も取り入れて説明

段階	時期	（年齢）	心理的課題		
Ⅰ	乳児期	（0～1歳頃）	基本的信頼	対	不信感
Ⅱ	幼児期初期	（1～3歳頃）	自律性	対	恥、疑惑
Ⅲ	遊戯期	（3～6歳頃）	自主性	対	罪悪感
Ⅳ	学童期	（7～11歳頃）	勤勉性	対	劣等感
Ⅴ	青年期	（12～20歳頃）	同一性	対	役割の混乱
Ⅵ	前成人期	（20～30歳頃）	親密性	対	孤立
Ⅶ	成人期	（30～65歳頃）	生殖性、世代性	対	停滞
Ⅷ	老年期	（65歳頃～　）	統合	対	絶望、嫌悪

エリクソンの漸成的発達段階

- 第一段階（乳幼児の発達課題：「基本的信頼感　対　不信」

乳児期の発達課題は「基本的信頼感の獲得」。乳児にとって生まれてきた社会（はじめは家族）は信頼できるという感覚が重要。

この世界は安心（信頼）できる

・重要な他者は「養育者」
・愛着の形成がキーワード
・希望という活力が得られる。

対

こんな世界は嫌だ（不信）

・虐待など不適切な養育
・自分や他者への無関心
・社会に対する不信感

エリクソンの漸成的発達段階

- 第二段階（幼児期前期の発達課題：「自律性　対　恥・疑惑」

幼児期前期の発達課題は「自律性　対　恥・疑惑」の葛藤を挙げている。この時期はできることが増え，積極的な自己主張をする（イヤイヤ期）。

しつけを中心とした外界へのやりとりによって，セルフコントロールする力，自律性を獲得する時期。

なんでも自分でやりたいな

・「意思」という活力を獲得

対

うまくできなかったら恥ずかしい，自分は無力

・やりたいを無視される
・過剰に統制される

エリクソンの漸成的発達段階

- 第三段階（幼児期後期の発達課題：「自発性・積極性　対　罪悪感」

乳幼児期後期の発達課題は「自発性・積極性対罪悪感」。色々なことをチャレンジし，探索したい時期。しかし時にはその行動を社会や文化が禁止することもある。

この経験は子供に対して大人や社会は何を望むのか，何を禁止するのかを感じさせ，自分の行動へのコントロールの基準となる。

自分で考えてなんでもやってみたい

対

この行動をしたら叱られた

・過度なしつけは罪悪感につながり，自発的な行動を妨げることに

エリクソンの漸成的発達段階

- 第四段階（児童期の発達課題：「勤勉性　対　劣等感」

　児童期の発達課題は「勤勉性対劣等感」の葛藤である。「学ぶ自分」を認識し，最後までやり遂げようと活動を繰り返すなかで，頑張れば成果につながることを実感することで喜びになる。一方で他者との比較などの対人感情が芽生えてくるため，自分の劣っているところを認識するようになる。

・「学び」を通して，成果ややりがいを感じられるように
・周りと比較しながら自分を見出す
・「有能感」という活力を獲得

エリクソンの漸成的発達段階

- 第五段階（青年期の発達課題：「アイデンティティの達成　対　アイデンティティの拡散」

　自分は何者であるか，どう生きるべきかを悩む時期。「拡散」とは自分がわからない，自分は本当の自分ではないといった感覚を指す。青年期はアイデンティティの達成とアイデンティティの拡散で揺れ動き，悩み，葛藤しながら「これが自分だ」という感覚を獲得していく。

これが自分だ

エリクソンの漸成的発達段階

- 第六段階（前成人期の発達課題：「親密性　対　孤立」

　若い成人期では一生を共にするパートナーとの関係を深めること，つまり親密性の獲得を重要な課題としている。結婚相手は親やきょうだいよりも長い期間一緒に生活することを考えれば，人生にとって大事な分岐点と言える。そしてこの親密性を達成すると，一般的に次の課題（生殖性）への関心が高まる。

・信頼できる人と関わることで「愛」という活力を獲得
・青年期までの課題を克服できない場合，他者と密に関われない
→表面的な付き合いしかできず，「孤立」に陥ってしまう。

エリクソンの漸成的発達段階

- 第七段階（成人期の発達課題：「生殖性・世代性　対　停滞」

　成人期では次の世代を支えていくものに積極的な関心を持つ「世代性」の発達が重視される。過去に上の世代から学んだことを生かし，子供や孫，部下や後輩などしたの世代に伝えていくと「世話」の能力が獲得。

・世代を考えて，貢献できることをする。
・次世代を見越し，行動する
・自分の世代だけを考えていると「停滞」に陥る
→自分の存在意味が不明に

エリクソンの漸成的発達段階

- 第八段階（老年期の発達課題：「自己統合　対　絶望」

成人期の発達として重要な意味を持つものに，喪失体験の多さが挙げられている。それまでは退職や家族，仕事など獲得する時期であったが，成人期では老いの自覚や離婚，両親の死など様々な喪失を経験する。こうした経験は親としての役割の終了や，退職に伴う社会的地位の喪失を意味している。つまり，変化を受け止める時期。

課題としては自分の想像した人生とは違っていても，大きな歴史の中で「自己統合」という自分の人生の意味を見出すこと。

→次の世代に残せるものがないと自分の存在した意味を確認出来ず「絶望」に陥る。

発達段階	年齢（目安）	発達課題と心理社会的危機	人格的活力（得られる力）
乳児期	0歳～1歳半	基本的信頼 vs 不信	希望
幼児期前期	1歳半～3歳	自律性 vs 恥・疑惑	意志
幼児期後期	3歳～6歳	自発性 vs 罪悪感	目的
学童期	6歳～13歳	勤勉性 vs 劣等感	有能感
青年期	13歳～22歳	アイデンティティの確立 vs 役割の混乱	忠誠
成人期	22歳～40歳	親密性 vs 孤独	愛
壮年期	40歳～65歳	生殖性 vs 停滞	世話
老年期	65歳～	自我の統合 vs 絶望	英知

おわりに

- 質疑応答
- 感想，コメント

長時間お疲れ様でした✿！
ゆっくり休んで，たくさん食べて，
また明日も頑張ってください。

ご参加・ご視聴
ありがとうございました。
また後期によろしくお願いします